

“ミサを構成している二つの部分、すなわち、ことばの典礼と感謝の典礼は、一つの礼拝行為となるように相互に固く結ばれている”（典礼憲章 56）

その第2部分：“EUCCHARISTIA（感謝の祭儀）”



- ① 御聖体の制定のコンテクスト（前後関係）：最後の晩餐
“さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。”（ヨハネ 13：1-2）
- ・ 食事の間
 - ・ 過越祭の時
 - ・ 受難を迎えるところ
- ② “私の記念としてこれを行いなさい”（ルカ 22：19-20/ 1 コリント 11：24-25）
- | | | |
|------|---------------------|---------|
| イエスは | — パンを取り・・・杯をお渡しになった | = 奉納 |
| | — 賛美—感謝の祈りを唱えて、 | = 奉献文 |
| | — パンを割って、 | = パンの分割 |
| | — 与えて・・・渡して・・・ | = 拝領 |

- ③
- ・ キリストの死と復活を記念すること。神の御業、その愛を覚えること・・・
 - ・ “エウカリスティア”（“ベラカ”）= 賛美と感謝すること
 - ・ “キリストのいけにえに” あずかること
 - ・ 過越の神秘を体験し、祝うこと
 - ・ 神の子羊の勝利を宣言すること
 - ・ キリストに結ばれること



- ④ われわれの救い主は、渡される夜、最後の晩餐において、御からだと御血による聖体のいけにえを制定された。それによって、十字架のいけにえを再臨のときまで世々に永續させ、しかも愛する花嫁である教会に、ご自分の死と復活の記念、すなわちいつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずな、過越の宴を託された。この宴において、「キリストが食べ物となられ、心は恵みに満たされ、将来の栄光の保証がわれわれに与えられる。
- したがって教会は、キリスト信者が、部外者あるいは無言の傍観者としてこの信仰の神秘に列席するのではなく、儀式と祈りを通してこの神秘をよく理解して、意識的に、敬虔に、行動的に聖なる行為に参加し、神のことばによって教えられ、主の御からだの食卓で養われ、神に感謝し、ただ司祭の手を通してだけでなく、司祭とともに汚れないいけにえをささげて自分自身をささげることを選び、キリストを仲介者として、日々神との一致と相互の一致の完成に向かい、ついには神がすべてにおいてすべてとなるよう細心の注意を払っている。」（典礼憲章 47-48）

参考文献

- 福者 ヨハネ・パウロ2世、回勅 「教会にいのちを与える聖体」、2003.
- 主よ、ヨハネ・パウロ2世、使徒的書簡 「一緒にお泊まりください」2004.
- 教皇ベネディクト16世、使徒的観告 「愛の秘跡」2007.